

# JELA NEWS

ジェラニュース 第62号

2023年12月15日 発行

発行責任者 渡辺 薫

一般財団法人 JELA 〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-20-26 TEL.03-3447-1521 FAX.03-3447-1523 jela@jela.or.jp www.jela.or.jp

難民支援事業 / 世界の子ども支援事業 / 奉仕者育成事業 / 緊急災害支援事業

## 私たちは、キリストの愛をもって、日本と世界の助けを必要とする人びとに仕えます

お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。(マタイによる福音書25章35～36、40節)



## 「2024 夏季アメリカ・ワークキャンプ」再始動!!

CONTENTS

奉仕者育成

「JELA English Bible & Work Camp 2023」参加者レポート (P2-3) / アメリカ・ワークキャンプ2024再開のお知らせと募集要項 (P5) / 「ディアコニア奨学生の集い」開催 (P7)

世界の子ども支援

チャリティコンサート2023 [佐賀県・愛知県] 報告 (P7) / 2023年最後のチャリティコンサートはJELAホールで (P8)

難民支援

寄稿: フィロクセニア奨学生 諸澤 明依さん [後編] (P6)

その他の記事

寄付者一覧(P8) / 編集後記(P8)

# JELA English Bible & Work Camp 2023

## 全国から9名が参加、創造の神を身近に『創世記』を学ぶ！

今年で2回目となる「JELA English Bible & Work Camp (イングリッシュ・バイブル&ワークキャンプ)」を、7月30日(日)から8月5日(土)までの1週間、「アジア学院 (ARI) \*」(栃木県那須塩原市)で開催しました。全国から9名の中高生が集い、緑と国際色の豊かな環境で、ARIの共通語である英語でコミュニケーションを取りながら農作業に挑戦し、神様の創造の尊さを肌で感じながら『創世記』を学びました。本紙にキャンプに参加した中学1年生～高校2年生の感想文を要約して掲載します。全文はJELAのブログでお読みいただけます。

※学校法人アジア学院 (ARI = Asian Rural Institute) アジア農村指導者養成専門学校は、主に開発途上国の若者を農村リーダーとして養成することを目的とするキリスト教主義の専門学校です。



アジア学院で収穫された食材を使い本格カレー作りに挑戦したキャンプ参加者たち

### ■ Irreplaceableな経験と出会い

上原 恵樹 (高1)



僕はキャンプでたくさんの素晴らしい経験と出会いができて本当に良かった。その中でも特に感じたことが4つある。1つ目は、農作業の充実感だった。今まで自分で野菜を育て、収穫することはなかったが、毎日の農作業で自然の恵みを食えることが生きることに繋がっているという実感が湧き、やりがいを感じた。2つ目は食事の豊かさだった。最初は普段と違うアジア学院の食事に戸惑ったが、自分たちで収穫した野菜を食べたり、皆でカレーを作ったりしているうちに、その食事の豊かさに気づいた。3つ目は他の参加者やリーダー、色々な国の学生達との交流だった。元々、初対面の人と話すのは苦手だったが、キャンプで色々な人と深い話ができて嬉しかったし、少し自信がついた。最後に、神様の愛と恵みを感じた時間だった。こんなにも創世記について深く学ぶことができたのは初めてだった。神様が天地を創造され、その一つ一つをかけがえのないものとして愛されたことを知り、自分も神様に愛された存在なのだと感じた。また、

普段は賛美歌を積極的に歌っていなかったが、みんなで賛美しているうちに自然と自分も歌うようになり、元気が与えられた気がした。

キャンプでのIrreplaceableな(かけがえのない)経験と出会いは、神様の愛と導きによるものだと感じている。今後も日々与えられている食べ物も含めた神様の恵みに感謝して生きていこうと思う。

### ■ 神様の愛と出会いの恵み

久保 李子 (中3)



今回のキャンプのテーマは「Irreplaceable: かけがえのない」でしたが、今回のキャンプで私は、とてもかけがえのない2つのことに気づきました。

1つは「神様の愛」です。バイブルスタディで、普段の生活でこれは神様の愛だなと感じたことは？と聞かれ、私は家族と答えました。私の親は過保護です。これは親の愛ですが、こんなに私を愛してくれてくれる親に出会わせてくれたのは神様の愛で、私達が毎日楽しく幸せに過ごしているのも神様の大きな愛の

おかげだと思いました。私は普段、そのような神様の愛にあまり気づく事ができず、親から「これも神様の愛だね」と言われ初めて気づくことがよくあります。しかし、キャンプで神様の愛について話し合い、学んだことで、身の回りにある神様の愛に少しだけ気づけるようになりました。例えば、みんなが元気に一週間のキャンプを過ごせたこと、これも神様の愛だと思います。

2つ目は「色々な人との出会い」です。私はこのキャンプに行く前は、1週間も親と離れた生活や、アジア学院の人たちとの英語での会話に不安でした。しかし、実際行ってみるとあっという間で、最終日は出会ったみんなとお別れするのが寂しくて泣いてしまいました。そんなみんなに会わせてくれた神様の愛に感謝しています。

### ■ 神様と共に土を耕して心を耕す

岡 聡次朗 (高1)

私がこのキャンプで感じた事は、私はたくさんのつながりの中で命をいただいて、命に生かされて生きているということです。

特にバイブルスタディやディボーションのプログラムでは、聖書を読んで自分を見つめ、仲間と共に思いを分かち合いました。今回は創世記を中心に学んで、神様が創造してくださった草やトマトなどにはどのような役割や意味があるのか考えました。その中で特に心に残ってい

る問いは、「あなたの命の意味は何か？」という問いです。はっきりとはわからないけれど、僕は神様のために働き、周りの人と喜び合って、神様からの愛や恵みの雨をしっかりと受けとって生きていきたいです。「僕はなぜ生まれたのですか？僕の命はどう用いられるのですか？」と神様に祈り求めたいです。僕は時々こうなったらどうしようとか、なぜこのような事が起きるのだろうかと不安に思う時があります。でも、その事も神様は良くして下さって恵みにして下さる神様に身を委ねて、安心したいです。



僕がこのキャンプに行く時に背中を押して下さった人にありがとう。僕の体になってくれた多くの命にありがとう。すべてを導いて下さった神様、ありがとう。僕は命を頂いて命として生きていきます。そして周りの人と命と神様と共に生きていきます。

### ■ 私と神様と隣人と自然と

小林 滉英 (中2)

キャンプは最高に楽しかったです。そして、本当にたくさんのことを学びました。その中でも一番心に残ったのがキャンプ4日目です。山下さん(アジア学院職員)が、アジア学院についてお話してくださいました。豚は人間に食べられるために、生後6か月で殺されてしまうそうです。僕はそれまで、豚肉を当たり前のように食べていました。しかし、「肉を食べるためには、動物の命を頂かなければいけない」ということを学びました。



Bible studyやDevotionも一つ一つが印象的でした。僕は今まで、人生の目的について考えたことがありませんでした。でも、神様が一人一人を創造してくださったから、他の人もそうだし、僕の人生も、意味をもって創ってくださったのだと思います。だから、これからは人生の目的が何か考えながら生きていきたいと思いました。自分と神様、他の人、自然との関係についての分かち合いでは、友だちの意見がとても印象的でした。自分と自然の関係が、自然に対する一方的な関係になってしまって、たくさん収穫したいからといって農薬や化学肥料を使うと、自然に優しくなくなってしまいます。自然に優しい農業をすることが大切だし、これは、神様との関係、他の人との関係でも同じことだと思いました。神様がこのキャンプに導いてくださったことに感謝しています。

### ■ 2度目のキャンプで学んだこと

菊地 恵那 (中3)



私がアジア学院のキャンプに参加したのは2回目だ。1回目に来たときと同じ話を聞いたはずだが、私の中での考え方が変わったように思えた。前回、私は友達と遊ぶことや美味しいご飯に夢中だった。今回はバイブルスタディや聞いた事をしっかりと受け止め、考えることができた。

バイブルスタディで、人と神との関係、人と人との関係、人と土や自然との関係について考える機会があった。私達が生きていることは当たり前ではない。生きるために必要な野菜や果物を作るには、良い土があってこそだと教わった。アジア学院では、科学肥料を使わずに鶏の糞や生ゴミを土に還し良い土を作ることで、また良い食べ物を作る。それを私たちが食べて、いのちが循環することを知り、土の大切さに気づいた。また野菜だけではなく、私達が食べているお肉にもいのちがある。お肉として食べるため

に育てられている家畜を改めて想うと、神様から与えられているいのちを大切にしていきたいと思った。

人も食べ物もいのちそのものだ。いのちが育っていくためには食べ物が必要であり、食べ物を育てていくためには土が必要だ。良い土は作ろうとしなければできない。当たり前なことではない。今まで当たり前だと思っていたこと1つ1つを大切にしていきたい。

### ■ 思い切って参加したワークキャンプ

木原 萌 (高2)



初めにどうしても伝えたいのは、キャンプに参加して良かったということです。実は去年すでにキャンプの存在は知っていましたが、しかし決断が遅く応募締め切りに間に合いませんでした。その時はほんの少し後悔するくらいでしたが、今は本当にもったいない事をしたと思う程悔しいです。去年参加しなかった理由の1つとして苦手な英語がありました。しかし、いざアジア学院に行ってみると、学生達が非常にフランクで、英語の会話に混乱して困惑の笑みを浮かべる私に、もう一度ゆっくり言い直してくれたり、母語でない英語に苦労しながらも互いに理解しようする姿を見せてくれたりして、英語が完璧に話せなくてもここに居ていいのだと安心しました。しかし、学生らの談笑を理解して一緒に笑えることは難しかったので、英語力をもっと鍛えたいと強く思いました。

また、いのちと食べ物は深く繋がっていることも学びました。4日目に森林でジャージー牛を放牧している牧場を訪問し、ただの家畜としてではない愛が牛達に注がれているのを目にしました。かつてその牧場に居た牛を使ったミートソースパスタを食べ、美味しいと思う自分の欲望に悲しい気持ちになりながらも、普段口にする食べ物にもっと感謝をしないといけないと感じました。

■ 頭も体も心もたくさん動かした1週間  
 久保田 陽方 (中1)



ぼくは、初めてこのワークキャンプに参加しました。英語で話さなきゃいけないと心配していたので、最初の方は緊張して、うまく話せなかったけど、後半は、緊張もほぐれ、ジェスチャーを交えながら、なんとか話が伝わりました。気楽に話せて、とても安心して参加できました。いざという時は、JELAのリーダーに頼りました。

毎日の農業体験では、ブルーベリー狩りとヤギの世話、野菜の収穫をしました。ヤギの世話は、ヤギの小屋から山の方の電気柵で囲んである場所まで移動させる作業をしました。ヤギは、途中草を食べたり、喧嘩したりしてなかなか進みませんでした。そんなヤギの行動が面白かったです。また、トマトの収穫では、どれくらい熟れているか、どれを取っていいのか、わかりませんでした。どれも簡単な作業だと思っていたけど、知らない事、わからない事、大変な事が沢山あって難しかったです。その時、近くにいた留学生に聞けばよかったですけど、緊張して聞けませんでした。

このワークキャンプを通して学んだことは、命は循環していることです。食べた後の骨などは、肥料となって土に還り、そこに、植物がはえて、それが、餌となりそれを食べた動物が、食卓に並ぶからです。これを知って、感謝して食べようと思いました。

■ かけがえのない学びと仲間たち  
 宮蘭 楓加 (中1)

今回のキャンプの中で学んだことの中で、特に心に残ったことを2つ話します。1つは、「私たちは多くのものに支えられて生きている」ということです。3日目のディポジションで「人間と土、神、人間同士のつながりがないままではいけないのか？」という質問がありま

した。初めは、人間同士と、人間と神の関係があれば何とかかなと思っていました。でも、考えてみると、食べ物が十分に手に入らなかったり、病気にかかって診察してもらえなかったり、土のつながりがないとたくさん困ることが起こるのだとわかりました。そこで改めて人間同士、人間と神の関係、それに加えて人間と土の関係の大切さに気づきました。これからは土との関係も大切にしていきたいなと思いました。



2つ目は「仲間の大切さ」です。キャンプの参加者のうち、ほとんどの人はキャンプで初めて会いました。しかし、みんなとそれぞれ素敵な思い出ができました。仲間がいるからこそ楽しく過ごせて、たくさんの学びがあつて、何より無事に一週間で過ごすことができたのだと思います。だから、これからは仲間をもっともっと大切に日々を過ごして行きたいです。短い期間ではありましたが、1週間ありがとうございました。キャンプ楽しかったです！

■ 苦手な英語にチャレンジ  
 力丸 巴渚 (中1)

アジア学院では、野菜などの切れ端や、雑草、卵の殻などを肥料にして、とても美味しい野菜を育てていました。キャンプでの農作業を通して、資源を大切にすることというのを学びました。化学肥料や農薬を使っていないので、収穫してそのまま食べることができます。

また、キャンプに参加して成長したと思うところもありました。それは留学生に自分から話しかけたり、ご飯に誘ったりすることができたからです。今までの私だったら、緊張して話しかけることができませんでしたけど、話しかけることができたのは、英語が苦手な私にも、留学生が優しく、明るく接してくれたからだだと思います。

バイブルスタディでは、「In the beginning God created the heavens and the earth.」(「初めに、神は天地を創造された」という創世記の最初の文を英語で暗記しました。また、英語で書かれている設問を読むことになり、読めない単語が出てきて困っていると、キャンプで出会った友達が読み方を教えてくれました。緊張したけど、その友達のおかげで、最後まで読むことができました。



私は、このキャンプで資源の大切さや、友達のやさしさ、大切さを改めて学びました。これからは、私に英語を教えてくださいました人達のように親切さや、やさしさを持って生活したいです。もちろん英語も頑張ってまたキャンプに参加したいです！

#引率JELAスタッフ(40代)の一言

神様の愛を感じる一週間でした。動植物を育て、収穫し、食べることでつなぐ私たちの命。農業を通じて生死について考えました。共通の感想は、「秩序のある生命循環はスゴい」です。神様の創られた世界がいかに素晴らしいか、その管理者(私たち)に与えられる使命について議論しました。「自然界の秩序」から踏み込んで、神様と私たちの関係について「放蕩息子」の劇を通して再考しました。福音の種が蒔かれました。参加者は神様から呼ばれて全国から集まったのだと思います。一緒に過ごせたことを感謝しています。

JELAニュースブログでは参加者全員のレポート全文をご覧いただけます！こちらのQRコードからどうぞ



2024年夏、アメリカ・ワークキャンプ 再開します！

2001年の開始から2019年まで、JELAは100名以上の中高生をアメリカ各地で実施される家屋修繕ボランティアに派遣してきました。コロナ禍を含め様々な事情を鑑み、2019年の夏を最後にアメリカへのボランティア派遣を中断していましたが、2024年夏、満を持して、太平洋を越えてのボランティア派遣を再開することを決定しました。

派遣先は、これまでと同じく、アメリカのコロラド州にオフィスを構える宣教団体、Group Mission Trips(通称グループ社)が夏期に全米で展開する家屋修繕ボランティアです。アメリカでは、戸建ての家を持ちながら経済的事情や家主の高齢化によって災害や経年劣化に対応した修繕が叶わない世帯が少なくありません。グループ社は、1990年にクリスチャン中高生による家屋修繕キャンプの働きを開始し、「他者への奉仕を通じてイエス・キリストに出会う」機会を中高生に提供することを使命として活動してきました。



「キリストの愛をもって日本と世界の助けを必要とする人々に仕える」というJELAの理念にも通じる働きです。2022年末、コロナ禍の収束を待って、JELAはボランティア派遣再開を検討し始めていました。

再開を計画するにあたり、日本から中高生を派遣する責任団体として、JELAは役員1名、職員1名を視察に派遣し、グループ社のキャンププログラムが以前と変わりなく福音に忠実であること、宿泊施設等が安全に管理されていることを確認しました。実際に参加者の現地中高生からボランティアキャンプの感想を聞くことも出来ました。「人に必要とされる奉仕が出来ているという達成

感が嬉しい」「朝夕の集会で神様と自分の関係が再構築された」「周囲にクリスチャンがほとんどいない。キャンプに来てこんなにたくさんの同世代のクリスチャンがいることを知り、とても励まされた」などの声が聞かれました。保護者のひとりには、「キャンプの1週間での子どもたちの変化が著しく、それを見られることが最高にうれしい」と目を細めて話していました。こうした言葉と参加者の笑顔を胸に、JELAはアメリカ・ワークキャンプの再開の準備を開始しています。

参加者募集の概要は以下のとおりです。たくさんのご応募をお待ちしております！

アメリカ・ワークキャンプ 2024 🇺🇸 参加者募集！！

◆派遣期間：2024年7月19日(金)～7月30日(火)

◆テーマ：「Influencer」(インフルエンサー)

◆主題聖句：ローマの信徒への手紙 12章2節  
 「あなたがたはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにして自分を変えていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかをわきまえるようになりなさい」

◆内容：ミシガン州で1週間のワークキャンプ(家屋修繕、聖書の学び等を通して信仰的・人間的成長を促す催し)に参加し、同州でホームステイもします。

◆年齢制限：2024年7月1日時点の年齢が14～20歳であること。

◆参加費用：25万円  
 ※友だちを誘って参加する場合、本人・友だち両方の参加費が5,000円割引になります！

◆問い合わせ・申込用紙請求先：

〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-20-26  
 一般財団法人 JELA アメリカ・ワークキャンプ 係  
 電話：03-3447-1521 (平日9:00～17:00)  
 FAX：03-3447-1523 E-mail：jela@jela.or.jp

◆締切：2024年4月末日必着

募集の詳細は、ホームページ(www.jela.or.jp)をご覧ください。



## 「外国籍を持つ子どもたちが健やかに、 ずっと笑顔で過ごせるような社会を作りたい」(後編)

JELAフィロクセニア奨学生  
諸澤 明依 さん

JELAは難民支援事業として給付型(返済不要)の奨学金を難民の方へ支給しています。今回は前号に引き続き、ミャンマーにルーツを持ち、明治大学で学ぶ諸澤明依(メイ チョトエイ)さんにご寄稿いただきました。

### ◎日本や祖国への想い

私自身日本で生まれ育ったため、正直に言うと幼い頃は両親の祖国であるミャンマーにあまり「アイデンティティ」や何か“熱い感情”を抱くことはありませんでした。むしろ「日本で学校に通い、日本で自立した生活ができるようになってほしい」という両親の教育方針のもとで育てられたことから、「他のみんなと同じがいい」と思うようになり、ミャンマー人であることがコンプレックスに感じられ、“普通である”ことに憧れを持っていました。

そのような中で、何かこれといったきっかけがあった訳でもないのですが、高校生あたりからミャンマー人であることにあまり抵抗を感じなくなり、自分から両親とミャンマー語で会話したりするようになりました。子どもの頃は友達に「ミャンマー語喋ってみて」と言われるのが嫌で仕方なかったことを振り返ると、今拙いながらもべらべらとミャンマー語を喋るようになったのが自分でも少し不思議です。

「昨年冬に帰化申請をし、現在は日本人として生活しています」という自己紹介を以前したところ、「ミャンマー人なの嫌だったの?」と聞かれたのですが、決して嫌だった訳ではなく、就職活動や生きやすさを見据えての自分なりの決断でした。私の母国(祖国)は紛れもなく日本ですが、「ミャンマー人であった」ことも確かな事実、大切なアイデンティティであり、今でも自分の中では過去形ではなく、現在形として「ミャンマー人である」と思っています。日本人でもあり、ミャンマー人でもあるのです。しかし、残念ながら、日本人になった今の方が

個人的には生きやすく感じます。

グローバル化が叫ばれるなか、このような境遇や思いを持つ子供が自覚に自分のアイデンティティを受け入れ、どう社会と共存していくかというのは大きな課題の一つであり、ぜひ当事者以外の皆さんにも何か考えてもらえるようなきっかけが作ればと考えています。

### ◎将来の夢

実は高校卒業後に1年間浪人生活を体験しており、当初は医学部への進学を希望していました。はたから見ると“医学部に落ちて仕方なく理工学部に進学した人”という印象かもしれませんが、いざ大学に入って学びを進めると専攻分野に興味を持つことができ、結果的には大変有意義な学生生活を過ごせたと思っています。勉強を続けているうちに、何か知識を活かせるような仕事がしたいと決意し、卒業後はメーカーで知的財産を扱う仕事をすることにしました。理系の就職というと研究開発職等がいわゆる花形とされていますが、開発者が生み出した技術を形にし、世に送り出すというのも、同じくらいやりがいのある面白い仕事だなと考えています。

社会人として働く面以外にも、もう一つ「外国籍を持つ子どもたちが健やかに、ずっと笑顔で過ごせるよ



うな社会を作りたい」という夢があります。根本にあるのは、上述したように「自分と似た境遇を持つ難民の子供たちにアイデンティティを嫌いになってほしくない、日本も祖国も両方好きになってほしい」という気持ちです。私自身自分のアイデンティティを受け入れられるようになったのは、周囲の友人や大人があまりの自分の受け入れてくれて、社会の一員として当たり前のように接してくれていたからだと思います。今この文章を読んでいる皆様も、ぜひ私の夢が叶うはじめの一歩として、周りにいる外国人や難民の子どもたちと仲良くなってください！(了)

### #JELAから一言

諸澤明依さんは、外国にルーツを持つ日本生まれの子どもとしての苦労や葛藤を乗り越えて、経済的に楽ではない中でも将来の志を持ちながら勉強に励んでこられました。JELAは学期ごとに各奨学生と成績表を見ながら面談を行いますが、明依さんの成績は素晴らしく、またご自身の学びや就職活動に前向きに取り組んでいる様子をお聞きして、毎度励まされる思いです。

今回のご寄稿の中で、ご自身のアイデンティティとの向き合い方や、未来の社会に対する夢を語ってくださいました。国籍的・民族的に多様化していく日本社会にあって、明依さんはひとつのロールモデルであると思います。そのような方を応援できることはJELAにとって大きな喜びであり、まさに難民の方々のために奨学金を提供する目的に繋がるものです。

来年から社会人となる明依さんのますますのご活躍をお祈りしつつ、JELAは引き続き日本で暮らす難民の方々への社会定着を支援してまいります。

## 第20回 世界の子ども支援チャリティコンサート 佐賀と愛知の計4教会で開催、延べ255人が来場

JELAは、第20回目となる「世界の子ども支援チャリティコンサート」を佐賀県と愛知県の計4教会で開催しました。コロナ禍を経て地方でのチャリティコンサートは、実に3年ぶりとなりました。

今回の演奏はオーボエを中心とした室内楽のトリオです。出演はオーボエ奏者の姫野徹さんと横智子さんをメインに、佐賀ではファゴット奏者の青木直之さんが共演、愛知ではピアニストの加賀都喜乃さんが共演してくださいました。奏者の皆さん、素晴らしい演奏をありがとうございました。

佐賀県では、9月15日に日本福音ルーテル小城教会でコンサートを開き、112人の方が集まってくださいました。また翌16日の日本福音ルーテル佐賀教会のコンサートには54人の方が集まってくださいました。

愛知県では、11月18日に日本福音ルーテル知多教会でコンサートを開



佐賀教会でのコンサートの様子



名古屋めぐみ教会でのコンサートの様子

き、44人の方が集まってくださいました。また翌19日の日本福音ルーテル名古屋めぐみ教会のコンサートには45人の方が集まってくださいました。

4会場で頂いた献金の総額は、264,739円でした。ご支援くださったご来場者の皆様、本当にありがとうございました。お捧げいただいた献金は、全額をJELAの世界の子ども支援のために用いさせていただきます。

また、今年のチャリティコンサートには、右記の団体からご協賛をいただいております。このチャリティコンサート実現のためにご協賛くださいました皆様に心より感謝申し上げます。

### 【協賛団体一覧】(順不同)

- \*シュローダー・インベストメント・マネジメント株式会社
- \*三井不動産リアルティ株式会社
- \*野村證券株式会社 新宿支店
- \*西村建築設計事務所
- \*株式会社トムス
- \*有限会社小川装建
- \*はこぶね便

12月16日(土)には、東京・恵比寿のJELAホールにて「クリスマス・チャリティコンサート2023」を開催しますので、そちらにもご期待ください。詳しくは8ページをご覧ください。

### 奉仕者育成

## 初となる「ディアコニア奨学生の集い」を開催 アジア学院留学生らが学びの成果や夢を語る

JELAのディアコニア奨学金の受給者が集う初のイベント「ディアコニア奨学生の集い」が、10月28日(土)にJELAミッションセンターホールで開催されました。

ディアコニア奨学金は、キリスト者としての成長を目的として学ぶ者、社会と人々に仕えることを目的に学ぶ者、国際社会への貢献を目的とし学ぶ者を対象に国内外の高等教育機関への進学や、研修機関への参加を支援するものです。

奨学生の集いには、アジア学院(※2ページ参照)で学んでいるインド出身のジミック・タムレイチャン(Zimik Tamrechan)さんらが参加してくださいました。日々の学びの成果や卒業後の夢について語ってくださいました。



スピーチをするジミックさん(右)

ジミックさんは、サーバント・リーダーシップや有機農業について次のように語りました。

「ご支援いただきありがとうございます。遠いインドからJELAの支援によってアジア学院で学ばせていただいています。来日して間もない頃、アジア学院の荒川朋子校長がトイレの掃除

をしているのを見て衝撃を受けました。インドではリーダーは命令するばかりで、自分で清掃をすることはありません。ましてトイレの清掃を校長が行うなど考えられないことでした。私はサーバント・リーダーシップ(リーダーの役割はメンバーや部下に奉仕することであるという考え)を目の当たりにしたのです。また私のコミュニティでは焼畑農業が主流ですが、有機農業を学んだことでこれこそが持続可能なやり方であると確信しました。地域に有機農業を伝えていきたいです」

集いには、約20人が参加して奨学生同士が励まし合うなど交流の場となりました。

またランチやミニコンサートを通じて、親睦を深めることができました。



2023年度のJELA世界の子ども支援チャリティコンサートの締めくくりは、12月16日(土)に東京・恵比寿のJELAミッションセンターホールで開催されます。(プログラムは右表参照)

クリスマスの時季にふさわしく、2000年にヘンデルの『メサイヤ』コンサートを機に誕生したグレイス合唱団と、韓国出身のゴスペルシンガー、サムエル・カンさんを迎えての公演となります。前半は、イギリスの作曲家ジョン・ラターが2011年の東日本大震災の被災者に捧げた『永遠の花』をはじめ、伝統的なクリスマス・キャロルなど合唱ならではの音楽の響きをお届けいたします。後半は、サムエル・カンさんのパワフルかつ繊細な歌声と合唱団の競演をお楽しみいただけます。



グレイス合唱団



サムエル・カン

また、当日は会場にアメリカ直輸入の手作りキルトの作品を数多く展示しますので、開演前や休憩時間中にご自由にご覧いただけます。コンサート終了後、直径60cm以上の大判のキルト(大作もあります!)

のオークションも開催します。キルトの売上は、当日頂くご寄付とともに、世界の子ども支援としてカンボジアのプレスクール建設、インドの女儿教育費等に充てさせていただきます。



キルト作品の一例

チャリティのコンサートとオークションを通して、JELAは今年も助けを必要としている子どもたちの支援に取り組みたいと思います。皆さまもぜひ会場からクリスマスの温かな思いをお届けください。皆さまのお越しをお待ちしております!

## 12月16日 チャリティコンサート プログラム

13:30	開場
14:00	チャリティコンサート開演 ○ジョン・ラター ♪「永遠の花」 ♪「このうるわしき大地」 ♪「主はあなたを恵み守る」 ○クリスマスキャロル ♪「久しく待ちにし」 ♪「あら野のはてに」 ○サムエル・カン ワーシップソング 他
15:30	キルトオークション

## 支援者一覧

(2023年7月1日~2023年10月31日)

(順不同・敬称略)

青木孝士/安藤淑子/伊久美麗子/井上新/大塚眞佐子/柿沢純江/  
勝部久子/河野久美子/金城香世/小泉小枝/古庄理世/  
後藤田さなえ/小長谷ヤヨコ/小林勝/Colin Smith/櫻井里子/  
篠原滋/清水恵満子/白井幸子/杉山美紀子/鈴木愛子/鈴木鐵也/  
関根昌子/高良研一/辻裕子/綱春子/寺澤陽子/東郷優子/  
豊川芽生/中野重夫/那須幸/西垣親子/西平薫/野口久志/  
芳賀美江/蓮香隆夫/原田靖彦・裕子/平林洋子/廣幸朝子/  
福地明子/古屋四朗/保坂和子/星野幸子/間瀬啓允/松岡俊一郎/  
光延和賀子/南節子/村上貞子/棟方玲子/森宜道/森保宏/  
森下真樹/安みぎわ/山口初子/渡辺聡/恵比寿聖書フォーラム/  
小城ルネ・こども園/グレイス合唱団/聖書フォーラム委員会/  
全国難民弁護団連絡会議/JELC市ヶ谷教会/JELC玉名教会

ご支援ありがとうございます。

匿名をご希望の場合は、ご送金の際にお知らせください。

## 編集後記

目に見えない神が、かつて、人が見て触れることも出来ない方として、しかも赤子としてこの世に来られた。それがクリスマスをお祝いする理由です。目に見えない神は、私たちの良心、自然への畏敬の念、人類の歴史という事実、これらを通して、常にその存在を人に語りかけています。JELAの事業に携わって下さる方々は、気づくと気づかざると、良心に従い、他を思いやる心に誠実に向き合うことを選択しています。その選を可能にしているのも、風のように私たちのそばを吹き抜ける聖霊なる神だと私は思っています。誠実にその道を一步一步進む先に、「はからずも」神を初めて知る、もっと知る、その瞬間があることをいつも祈っています。ぜひ、今年の出来事の一つ一つ数え思い出してみてください。どの場面にも神の守りを見つけれられる幸いが皆様にも訪れますように。クリスマス、おめでとうございます。(渡辺薫)

JELAを  
継続的に支える  
JELAサポーター  
を求めています!

年1,000円から! クレジットカードによる  
自動定期寄付プログラムです。



詳しくは  で検索



JELAは持続可能な開発目標 (SDGs) を支援しています。

SDGsは、2015年に国連サミットで採択された、2030年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標です。

2030年に向けて  
世界が合意した  
「持続可能な開発目標」です



〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-20-26  
☎ 03-3447-1521 ☎ 03-3447-1523  
🌐 www.jela.or.jp ✉ jela@jela.or.jp

寄付金のご送金先:  
ゆうちょ銀行 口座番号:00140-0-669206 (加入者名:一般財団法人JELA)  
三井住友銀行 飯田橋支店 普通2896506 (口座名義:イパブリック・カンボジア)